

ドイツ語専攻学生への音楽の講義について ——学生へのアンケート集計結果を中心に——

木村 佐千子

1. 研究の目的

日本では、西洋音楽移入の初期にドイツ人音楽家から洋楽を学んだといった経緯もあり、ドイツは音楽の本場というイメージがある¹⁾。また、オーストリアのウィーンは「音楽の都」として知られ、大勢の日本人観光客が訪れる。ベートーヴェンやモーツァルトの作品をはじめ、ドイツ語圏の作曲家の書いた音楽が日本で親しまれていることは言うまでもない。ドイツ語圏の国々の文化や文学を理解するうえで、またドイツ語圏の国々との交流で、音楽は重要な要素であると言える。それゆえ、楽器を習っていたり音楽に興味をもっていたりすることがきっかけで、ドイツ語学科・独文学科を受験・入学してくる学生も少なくないと考えられる。

国内の大学では、ドイツ語圏の音楽は「西洋音楽史」等の一般教養科目のなかで講じられることが多く、ドイツ語圏の音楽を中心に据えて概説する授業は少ない²⁾。だが、すべてのドイツ語・独文専攻学生〔以下、ドイツ語専攻学生

- 1) ドイツ政府観光局は『音楽の国ドイツ』という日本語パンフレット（全24頁）を作成・配布している。
- 2) 獨協大学以外にも、国内で「ドイツ音楽」、「ドイツ語圏の音楽」等の名称の講義が行われている大学はあるが、シラバスを見る限り、バッハのミサ曲やシューベルトの歌曲集など、ひとつの作品または作品集に焦点をあてて扱う授業であり、概説的なものではないようである。また、ドイツ音楽研究学会の機関誌 *Die Musikforschung* に毎年2回掲載されるドイツ語圏大学の音楽学関係の授業一覧で見ると、ドイツ語圏

と記す]に幅広い西洋音楽史の知識を要求するのは、モチベーションの点からいっても難しい。ドイツ語専攻学生にはドイツ語圏に焦点をあてた分かりやすい教えかたをするほうが望ましく、関心をもたせやすいと考えられる。

ドイツ語専攻学生を対象とした「ドイツ語圏の音楽」の教育方法に関する研究は、これまで大規模なかたちでは行われず、個々の教員の裁量・努力に任されてきたと言える³⁾。また、日本語で出されているドイツ語圏の音楽についての概説的な文献は、事典項目を除けば、1966年翻訳出版のロスタン著『ドイツ音楽』⁴⁾のみであるが、この書籍は大学での講義用参考文献としては活用しにくい。私は、2003年度より、獨協大学で「ドイツの音楽」の講義（ドイツ語学科3学期生以上対象の専門講義科目、他学科生も受講可能、毎週1コマ90分、春・秋学期）⁵⁾、および「ドイツ語圏入門」というオムニバス授業（ドイツ語学科1～2学期生必修科目、毎週1コマ90分、春・秋学期）のなかでの音楽の講義（年に1回90分）を担当させていただいている。音楽ではなくドイツ語を専攻する学生にとってどのような授業がよいのか私なりに考え、試行錯誤しながら授業に取り組んできた。まず、音楽大学での講義ではないので、詳細な楽曲分析を行うことはせず、専門的な用語を多用しないようにということは、最初の年から心がけている。着任したての2003年度に「ベートーヴェンがドイツ語圏の音楽家だということは知りませんでした」と学生に言われて認識を新たにしたが、そのような感想を述べる学生は、翌年以降もいる。バッハやモーツァルトについても同様である。このようなことから、授業の前提となる学生の知識、モチベーションや求める内容について、調査を行う必要

の大学でも「ドイツ語圏の音楽」といった題目の概説的な講義は行われていない。

- 3) ドイツ語専攻学生を対象とする音楽ゼミナールについては、本学のバイスヴェンガー教授の研究がある。Vgl. Beißwenger, Kirsten. „Musikwissenschaftliches Fachseminar für German-Studies-Studenten. Ansätze zu einer Methodik im fachlichen Unterricht“. In *Dokkyo-Universität Germanistische Forschungsbeiträge* Nr. 59 (März 2008), S. 45-59.
- 4) ロスタン、クロード『ドイツ音楽』吉田秀和訳。東京：白水社、1966年。（文庫クセジュ 394）全147頁である。
- 5) 獨協大学では、他に「フランスの音楽」、「イタリアの音楽」という講義が開講されている。

があると考えた⁶⁾。今回は、この点について、「ドイツ語圏入門」の講義中に行った学生へのアンケート調査結果をもとに報告し、授業内容の改善につなげたい。

本稿では、まずアンケート実施の概要を記し、2007年度と2008年度に行ったアンケートの結果を別々に報告する。その後でまとめを行いたい。

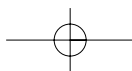
2. アンケート調査実施の方法

ドイツ語専攻学生を対象にドイツ語圏の音楽についての授業を行うにあたっての前提を探るため、2007年6月6日および2008年7月2日、獨協大学において、ドイツ語学科1～2学期生必修科目の「ドイツ語圏入門」のドイツ語圏の音楽に関する講義回にアンケート調査を行った。講義の最初にアンケート用紙を配布し、すこし時間をとって記入してもらった。用紙の回収は、授業終了時に行った。2007年度は178枚のアンケート用紙を回収した。2008年度は138枚の回答を得たが、2年生以上の学年が記されている場合には、前年度に同内容のアンケートに回答している再履修者と考えられるため、除外した。その結果、調査対象とする2008年度の回答数は125となった。

アンケートの内容は、2007年度に授業の感想を記す欄を設けていた以外、2回ともほぼ同じである⁷⁾。質問項目は全部で7項目とした。2007年度は、学生の出欠を確認する用紙を兼ねていたのでアンケート用紙に記名をしてもらったが、2008年度は出席確認を別の用紙（授業レポートシステムの用紙）で行っ

6) このほかに、映像・音響資料の活用方法について検討しなければならないと考えている。学生からは、映像資料（DVD等）をたくさん見せてほしいとの希望が例年出される。音楽専攻ではないので、コンサートに行ったことがあまりなかったり、ひとつひとつの楽器をよく見たことがなかったりする学生もおり、映像資料を見せることにも一定の意義はあると考えられる。しかし、映像資料は録音資料（CD）に比べて種類が限られており、演奏の質が必ずしもよくない。また、聴くことに集中できないという問題点も考えられる。映像・音響資料の活用方法については、今後の課題として検討したい。

7) 2008年度は、情報センターの授業レポートシステムの用紙に感想を記させた。



たため、記名は任意としたが、無記名は15名のみだった。なお、アンケート用紙の下に「アンケート項目への回答内容については、記した人の名前等が分からないかたちで、授業改善や研究の目的のために使用させていただく場合があります。ご了承のほど、お願いいたします。」と付記した。

【2008年度アンケート用紙（オリジナルはA4版）】

ドイツ語圏入門（音楽・木村）アンケート

ドイツ語学科（ ）年（ ）組 氏名（ ）

- (1) 普段、音楽をよく聴きますか？ { はい いいえ } ←丸をつけてください
「はい」と答えた方は、どのようなジャンルの音楽をよく聴きますか？
- (2) 楽器の演奏や声楽（歌）のレッスンを受けたことがありますか？ { はい いいえ }
「はい」と答えた方は、具体的な楽器名等を記してください。
- (3) 現在、学内・学外で音楽系のサークル活動等に加わっていますか？ { はい いいえ }
「はい」と答えた方は、サークル等の名（または種類）を記してください。
- (4) 本日の授業を受ける前に、ドイツ語圏の音楽の作曲家・演奏家で知っている人物等がいましたか？ もしいた場合、記してください。
- (5) ドイツ語圏の音楽作品で、特に好きなものやよく聴くものがあれば、記してください。
- (6) ドイツ語圏の音楽に対するイメージ等があれば、記してください。
- (7) ドイツ語学科を受験し、ドイツ語学科に入学するにあたり、ドイツ語圏への音楽への知識やイメージは何か関係があったでしょうか？ { はい いいえ }
「はい」と答えた方は、どのような関係があったか、具体的に記してください。

アンケートへのご協力、ありがとうございました。アンケート項目への回答内容については、記した人の名前等が分からないかたちで、授業改善や研究の目的のために使用させていただく場合があります。ご了承のほど、お願いいたします。

ドイツ語圏の音楽という場合の「音楽」が何を指すのかについては、特に定義しなかった。いわゆるクラシック音楽に限定するつもりはもちろんなく、実際にポップス等のアーティストを記載した学生もいたが、回答内容から、クラシックに限るものと自ら解釈した学生もいたことがうかがえた⁸⁾。

なるべく詳しく、また教員側の先入観を加えずに意見・傾向を知りたいとの考えから、自由記述欄を多く設けた。自由記述欄への記入の分量は学生によって大きく異なり、無記入の学生もいれば、欄外にまで非常に多く記した学生もいた。

3. 調査結果

以下に 2007 年度と 2008 年度のアンケート結果を、まずは別々に報告する。全体の傾向を把握するために、少数意見も含め、できる限り詳細に報告したい。なお、(1)、(4)、(5)では、一覧には回答数 5 以上のものを挙げた。回答数 1～4 のものは分けて列挙し、括弧内に回答数を付記した。回答は、数の多いものから順に挙げ、数が同じ場合は 50 音順、欧文は ABC 順に記すことを原則とした。

① 2007 年度

2007 年度の回答数は、上記の通り 178 である。回答した学生の内訳は、1 年生 172 名、2 年生 5 名、3 年生 1 名であった。所属はすべて獨協大学外国語学部ドイツ語学科である。なお、学年・組・氏名以外すべて無記入の学生が 1 名いた。以下、アンケート項目の順に、回答の集計結果を記す。

(1) 「普段、音楽をよく聴きますか？」

この質問に対し、「はい」に丸をつけた学生は 152 名、「いいえ」に丸をつけ

8) たとえば、質問 (5) 「ドイツ語圏の音楽作品で、特に好きなものやよく聴くものがあれば記してください」に対し、「クラシックはあまり聞かない」と回答した学生がいた。

た学生は 25 名、無記入 1 名であった。「はい」の場合、どのようなジャンルの音楽をよく聴くか、さらにたずねている。その結果、以下のようなものが挙げられた。回答方式は自由記述式であり、複数の音楽ジャンルを記した学生が多数いる。また、「ジャンル」の定義については記していなかったため、アーティストの個人名や作品名など一般にジャンルとは言えないもの、あるいは「邦楽」と「J-POP⁹⁾」のように重なり合うもの、「ロック」と「UK rock」のように一方が他方に含まれるものもあるが、学生による回答の表現をそのまま用いる。なお、「はい」に丸をつけていても自由記述欄に記入していなかった学生が 15 名いた。

(人)

よく聴く音楽ジャンル	回答者数
J-POP	58
ロック	42
クラシック	39
洋楽	23
ポップス	17
ジャズ	14
サウンドトラック	6
邦楽	6
カントリー	5
R & B	5

9) J-POP は、ラジオ放送局 J-WAVE が 1988 年に生み出した造語である。烏賀陽弘道によれば、「J ポップという名称は、レコード会社という売り手の発案で、FM ラジオというマスメディア上のカテゴリーとして作られた」（烏賀陽弘道『J ポップとは何か。巨大化する音楽産業』岩波書店、2005 年、15 頁）ものであり、「世界と肩を並べる日本の音楽」（同書 16 頁）になるようにとの意図を込めて名付けられた。内容としては、日本的な要素を切り捨て、洋楽にできるだけ近づけた音楽（同書 24 頁）である。具体的には「ロック系のポップス、あるいは洋楽色の強い若い世代向けのポップス」（みつとみ俊郎『音楽ジャンルって何だろう』新潮社、1999 年、136 頁）を指すとする定義がある。

パンク(4)、メタル(4)；オペラ(3)、ヒップホップ(3)、ヘヴィーメタル(3)；吹奏楽(2)、ボサノヴァ(2)、ミュージカル(2)、Alternative (2)；アイリッシュ(1)、エモ(1)、演歌(1)、歌手のうた(1)、歌謡曲(1)、川嶋あい(1)、ゲームのサントラ(1)、千の風になって(1)、ディスコミュージック(1)、テクノ(1)、トランシーロック(1)、トランス(1)、日本の合唱曲(1)、ニューエイジ(1)、ノンセクション多種(1)、ハードロック(1)、久石譲(1)、ヒーリング(1)、ファミレス・ボンバー(1)、ファンク・ソウル・R & B・HIPHOP・レゲエ以外(1)、ブルース(1)、フレンチポップ(1)、プログレ(1)、ポピュラーロック(1)、ユーロビート(1)、ラウンジ(1)、レゲエ(1)、Die Prinzen (1)、German Metal (1)、HY (1)、Mixture (1)、UK-pop (1)、UK rock (1)

(自由記述式、複数回答あり。回答者数 137 名、総回答数 273)

(2) 「楽器や歌のレッスンを受けたことがありますか？」

「はい」に丸をつけた学生が 120 名、「いいえ」が 57 名、無記入 1 名であった。「はい」の場合、具体的な楽器名等を記してもらった。自由記述方式をとっており、複数の楽器等を記した学生がいた。また、「はい」に丸をつけていても具体的な楽器名を記入していない学生が 5 名いた。「レッスンを受ける」ということについて定義しなかったため、音楽教室や個人レッスンのみならず、小・中・高等学校の授業での取り組みや部活動も含めた者がいた。そのことについて注記した学生もいたが、特に区別はしなかった。楽器名については、「バスクラリネット」のように音域を詳述している場合は「クラリネット」とは別に扱った。

(人)

レッスンを受けたことのある楽器等	回答者数
ピアノ	83
エレクトーン	11
ヴァイオリン	9
クラリネット	7
フルート	7
合唱	6
声楽／歌	5
トロンボーン	5

箏(4)、打楽器／パーカッション(4)、ホルン(4)；アコーディオン(3)、ヴァイオリン(3)、オーボエ(3)、サクソ(3)、トランペット(3)、ユーフォニアム(3)；エレキギター(2)、ギター(2)、ファゴット(2)、リコーダー(2)；アルトホルン(1)、小太鼓(1)、琴¹⁰⁾(1)、コントラバス(1)、チェロ(1)、聴音(1)、テノールサクソ(1)、電子ドラム(1)、ドラムス(1)、ハーブ(1)、バスクラリネット(1)、バリトンサクソ(1)、メロディオン(1)、木琴(1)

(自由記述式、複数回答あり。回答者数 115 名、総回答数 185)

(3) 「現在、学内・学外で音楽系のサークル活動等に加わっていますか？」

「はい」と答えた学生が 26 名、「いいえ」が 150 名、無記入 2 名であった。「いいえ」には、過去に加わっていたが退部した、これから加わる予定と注記したものも含む。「はい」の場合、サークル等の名称または種類を記してもらった(自由記述式)。複数の学生が加わっているサークル等は 4 つあり、管弦

10) 「琴」と「箏」ということばは、混用もみられるが、本来は「箏」は柱と呼ばれる可動式支柱で音程を調節するのに対し、「琴」には柱がないという楽器構造のうえでの区別があるため、ここでは分けて扱う。

楽部¹¹⁾ (9名)、D.I.G.¹²⁾ (3名)、OLFM¹³⁾ (3名)、ジャズ (2名) であった。1名ずつが挙げたサークル等は、オケ¹⁴⁾、高校の弦楽合奏部のOB楽団、ジャズ研¹⁵⁾、吹奏楽団、バンド、舞踏研究会¹⁶⁾、Music Company With¹⁷⁾、Rock Section¹⁸⁾、Singing Club¹⁹⁾である。

(4)「本日の授業を受ける前に、ドイツ語圏の音楽の作曲家・演奏家で知っている人物等がありましたか？ もしいた場合、記してください。」

無記入15名、「知らない」、「いない」と記した2名以外の170名の学生は、何らかの音楽家の名を記していた。自由記述式としたため、最高で19名のドイツ語圏の音楽家の名を記した学生もいた。カタカナ表記の明らかな誤り（ヴァッハ、ヴェートーヴェン等）は修正した。また、ショパンやドビュッシー、ドヴォルザークなど、生没地も主な活躍地もドイツ語圏ではなく「ドイツ語圏の」作曲家・演奏家と言えない人物、あるいはゲーテなど活動の中心が音楽ではなく、通常は「作曲家・演奏家」に分類されない人物も挙げられていたが、集計には加え、*印を付した。同姓の著名な音楽家が複数いる場合、特に注記がない限り最も知名度の高い音楽家を指していると考えた。たとえば、「R. シューマン」のみならず、「シューマン」と姓のみ書かれていてもロベルト・シューマン Robert Schumann (1810-1856) を指すと考え、「クララ・シューマン」、「C. シューマン」の場合のみロベルトの妻でピアニスト、作曲家であったクラ

11) 学友会文化会団体。『2008年度獨協大学学友会団体一覧』（学友会総務部長室事務課発行、2008年6月30日現在）によれば、部員数は104名。以下、学内団体の部員数は、同じ資料にもとづき、2008年6月30日現在の人数を記す。

12) 愛好会文化系団体。軽音楽サークル。部員数は40名。

13) 愛好会文化系団体。ア・カベラのサークル。部員数は145名。

14) オケ（オーケストラ）とは、大学オケ（獨協大学管弦楽団、管弦楽部の通称）を指す可能性もあるが、学外のオーケストラに加わっている可能性も考えられるので、「管弦楽部」とは分けて扱った。「バンド」も同様である。

15) モダンジャズ研究会は、文化会団体。部員数32名。

16) 体育会団体。部員数46名。音楽の演奏を行う団体ではない。

17) 愛好会文化系団体。部員数87名。

18) 軽音楽部ロック・セクションは、文化会団体。部員数61名。

19) 愛好会文化系団体。部員数22名。

ラ Clara Schumann, geb. Wieck (1819-1896) を指すものとして集計した。シュトラウスの場合は難しいが、ヨハン・シュトラウスと記されている場合は《美しく青きドナウ》などの曲が日本でもよく知られているヨハン・シュトラウス II 世（子）Johann Strauß II (1825-1899) を指しているものとして集計し、「ヨハン・シュトラウス I 世」、「シュトラウス」、「リヒャルト・シュトラウス」とは分けた。なお、下の一覧では、作曲家の原綴や生没年、演奏家の専門とする楽器等の情報を付記することはしなかった。

(人)

知っているドイツ語圏の作曲家・演奏家	回答者数
ベートーヴェン	128
バッハ	107
モーツァルト	102
シューベルト	73
ヴァーグナー	35
ハイドン	29
ブラームス	24
J. シュトラウス/ヨハン・シュトラウス II 世	21
シューマン/R. シューマン	18
リスト	16
メンデルスゾーン	15
パッヘルベル	7
ヘンデル	7
シヨパン* ²⁰⁾	6

クララ・シューマン(4)；ウィーン少年合唱団(2)、シュトラウス(2)、ツェルニー(2)、テレマン(2)、ブルクミュラー(2)、マーラー(2)；オルフ(1)、カラヤン(1)、クライスラー(1)、ゲーテ*(1)、サリエリ(1)、マイケル・シェンカー(1)、ヨハ

20) ポーランドに生まれ、フランスで没した作曲家である。

ン・シュトラウス I 世(1)、リヒャルト・シュトラウス(1)、ドヴォルザーク*²¹⁾(1)、ドビュッシー*²²⁾(1)、ブルックナー(1)、アンネ・ゾフィー・ムッター(1)、Herbert Grönemeyer (1)

(自由記述式、複数回答あり。回答者数 170 名、総回答数 617)

ツェルニー、ブルクミュラーの名を挙げた学生が複数いるのは、日本でその曲集がピアノ教本としてよく用いられているためであろう。

(5) 「ドイツ語圏の音楽作品で、特に好きなものやよく聴くものがあれば記してください。」

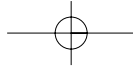
無記入が 67 名、「特になし」等と記した学生が 12 名、「クラシックはあまり聞かない」が 1 名いたが、その他の 98 名の学生は何らかの音楽を記していた。(自由記述式で複数回答あり。)
「音楽作品」についてたずねたが、作品名ではなく作曲家名やグループ名、ジャンル名のみを記した学生もいた。作品名だけが挙げられている場合、下の一覧では、敢えて作曲家名は補足していない。作曲家の主な活躍地等がドイツ語圏ではないなど、明らかに「ドイツ語圏の音楽作品」と言えないものには、やはり*印を付した。

21) チェコの作曲家である。
22) フランスの作曲家である。

(人)

ドイツ語圏の音楽作品で特に好きなものやよく聴くもの	回答者数
魔王	13
アイネ・クライネ・ナハトムジーク	10
モーツァルト	10
第九	9
クラシック	7
青く美しきドナウ	6
カノン	6
野ばら	5
モーツァルトのトルコ行進曲	5

運命(4)、田園(4)、バツハ(4)；エリーゼのために(3)、月光(3)、G線上のアリア(3)、シヨパン*(3)、ベートーヴェンの悲愴(3)、魔笛(3)、モルダウ*(3)、ラ・カンパネラ(3)、Die Prinzen (3)；ウィーン少年合唱団(2)、カルミナ・ブラーナ(2)、ベートーヴェン(2)、ベートーヴェンの交響曲第7番(2)、Revolverheld (2)；愛の夢(1)、アヴェ・マリア [作曲家名記載なし] (1)、ヴァーグナー(1)、オーケストラの曲(1)、革命*(1)、カラヤンのアルバム(1)、ヤン・ギュンス (バスクラリネット) のCD(1)、クレイジー・フロッグ*(1)、グローリア [作曲家名記載なし] (1)、コーラス(1)、ゴルトベルク変奏曲(1)、シューベルトのアヴェ・マリア(1)、シューベルトの歌曲(1)、シューマンのアラベスク(1)、J. シュトラウス(1)、神曲(1)、大公(1)、テクノミュージック(1)、ドイツのポップ・ロック(1)、ニュルンベルクのマイスタージンガー(1)、パイプオルガン(1)、バロック(1)、ピアノ曲(1)、100曲セットに入っている様な定番の曲(1)、フィガロの結婚(1)、冬の旅(1)、ベートーヴェンの交響曲(1)、ベートーヴェンのソナチネの1番(1)、ベートーヴェンのロマンス第2番(1)、ベートーヴェンの別れの曲 [ママ] (1)、菩提樹(1)、ます(1)、ミュージカルの「エリザベート」(1)、ミュージカルの「モーツァルト！」(1)、メヌエット [作曲家名記載なし] (1)、もみの木(1)、流浪の民(1)、Helloween というバンドの曲(1)、Die Prinzen „Olli Kahn“ (1)、



Silbermond (1)、Sonata Arctica (1)、Wir sind Helden (1)
 (自由記述式、複数回答あり。回答者数 98 名、総回答数 162)

(6) 「ドイツ語圏の音楽に対するイメージ等があれば、記してください。」

無記入が 53、「なし」と記入したものが 5、「分からない」という回答が 1 あったが、それ以外の 119 名は何らかのことばでイメージを記していた。当然のことながら記入内容が人によって大きく異なるため、ここでその全てを紹介することはできない。同じ方向の回答が複数あったものに限って、挙げたい。

(人)

ドイツ語圏の音楽に対するイメージ	回答者数
クラシックのイメージ／クラシックの本場	30
力強い	9
暗い	7
美しい、重い／重厚／重々しい、かたい、繊細	各 5
厳格、綺麗／キレイ、宗教音楽／宗教色が強い、有名な音楽家や有名な曲が多い	各 4
ウィーンは音楽の都、オーケストラが多い、オペラ、かっちりしている、こわい、神聖／荘厳、低音を使う	各 3
今はポップスも多い、正統派、切ない、壮大、ドイツ語圏の人々はよくコンサートに行くなど音楽好き、パイプオルガン、優雅	各 2

(自由記述式、複数回答あり。回答者数 119 名)

(7) 「ドイツ語学科を受験し、ドイツ語学科に入学するにあたり、ドイツ語圏の音楽への知識やイメージは何か関係があったのでしょうか？」

回答は、「はい」が 40、「いいえ」が 136、無記入が 2 であった。「はい」の場合は、具体的にどのような関係があったのかを問うている。ひとりずつの記入内容が異なるため、やはり複数の学生が同じ方向で記している場合に限り、

紹介する。なお、「はい」に丸をつけていても具体的な関係を記入していない学生が2名いた。

(人)

ドイツ語学科選択とドイツ語圏の音楽の関係	回答者数
クラシックが好きでドイツ語圏のことを学びたいと考えた。	5
音楽史を学びたいと思った。	3
歌詞のある作品（「魔王」、ミュージカル）をドイツ語で理解したいと考えた。	3
ピアノを習っていてベートーヴェンやモーツァルトの曲を弾いていたので。	3
音楽の先生（個人レッスン）にドイツ留学時の話などをきいてドイツに興味をもった。	2
音楽を聴いて、文化の背景について学びたいと思った。	2
高校の授業でドイツの音楽を聴いたり、リートを歌ったりして、ドイツに興味を持つようになった。	2
吹奏楽部でドイツの音楽に接したので。	2
好きなグループ、合唱団を聴いてドイツ語を学びたいと思った。	2
ドイツ音名やドイツ語の音楽用語に接してドイツ語に興味を持った。	2

(自由記述式。回答者数 38 名)

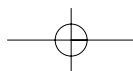
ヴァイオリニストを目指してドイツに留学していたという学生も1名いた。

② 2008 年度

質問内容は2007年度と同じである。上述の通り、獨協大学ドイツ語学科1年生125名からの回答を検討の対象とした。

(1) 「普段、音楽をよく聴きますか？」

この質問に対し、「はい」に丸をつけた学生が108名、「いいえ」に丸をつけ



た学生が17名であった。「はい」の場合、どのようなジャンルの音楽をよく聴くかさらにたずねている。2007年度と同様、自由記述欄に何も記入していなかった学生(5名)と複数のジャンルを記した学生がいた。ジャンル名は、学生の表記に従っている。

(人)

よく聴く音楽ジャンル	回答者数
J-POP	53
クラシック	32
洋楽	26
ロック	19
ポップス／ポピュラー／ポップ・ミュージック	14
ジャズ	12

R & B (4)；ケルト(3)、吹奏楽(3)、パンク(3)；合唱(2)、ヒップホップ(2)、邦楽(2)、邦楽ロック(2)；ヴァイオリン協奏曲(1)、映画音楽(1)、演歌(1)、オールジャンル(1)、サントラ(1)、打楽器アンサンブル(1)、ダンスミュージック(1)、テクノ・ユーロビート・トランスなどクラブミュージック系(1)、ハードロックからデスメタ・グラインドコアまで(1)、ピアノソロ(1)、ビジュアル系(1)、民族調(1)、メロコア(1)、ロック以外全般(1)、Alternative (1)、deathmetal (1)、Metal (1)、Mixture (1)、UK (1)

(自由記述式、複数回答あり。回答者数103名、総回答数196)

(2)「楽器や歌のレッスンを受けたことがありますか？」

回答は、「はい」が87、「いいえ」が38であった。「はい」の場合、具体的な楽器名等を記してもらった。自由記述式で、複数の楽器等を記した学生もあり、なかにはひとりで5つの楽器のレッスンを受けたことがあるという学生もいた。「はい」に丸をつけていても楽器名を記入していない学生が2名いた。

(人)

レッスンを受けたことのある楽器等	回答者数
ピアノ	63
ヴァイオリン	11
エレクトーン	6
クラリネット	5

サクソ(4)、トロンボーン(4)；合唱(3)、ドラム(3)、フルート(3)、ホルン(3)；
 ヴィオラ(2)、エレキギター(2)、ギター(2)、三味線(2)、声楽／歌(2)、箏(2)、ソ
 ルフェージュ(2)、テューバ(2)、発声(2)、パーカッション(2)、リコーダー(2)；
 アコーディオン(1)、オカリナ(1)、クラシックギター(1)、指揮(1)、チェロ(1)、
 トランペット(1)、ファゴット(1)、ユーフォニウム(1)、和太鼓(1)

(自由記述式、複数回答あり。回答者数 85 名、総回答数 136)

(3) 「現在、学内・学外で音楽系のサークル活動等に加わっていますか？」

この質問に対し、「はい」と答えた学生が 24 名、「いいえ」が 101 名であっ
 た。「はい」の場合、サークル等の名称または種類を記してもらった。

複数の学生が加わっているサークル等は 3 つで、管弦楽部 (9 名)、ア・カ
 ペラのサークル OLFM (7 名)、Swinging Cats Jazz Orchestra²³⁾ (2 名) である。1
 名ずつが挙げたサークル等は、管弦楽、管弦楽団²⁴⁾、古典ギター部²⁵⁾、吹奏
 楽、ダンスフリースタイル²⁶⁾、バンド、Meister Singers²⁷⁾であった。回答者数は
 24 名だが総回答数が 25 なのは、管弦楽部とバンドの両方に加わっているとい
 う学生が 1 名いたためである。

23) 文化会団体。部員数 54 名。

24) 「管弦楽」、「管弦楽団」は、獨協大学管弦楽団 (管弦楽部) なのか外部団体なのか
 不明。

25) 文化会団体。部員数 17 名。

26) 愛好会体育系団体。部員数 90 名。音楽の演奏を行う団体ではない。

27) 文化会団体。部員数 61 名。

(4) 「本日の授業を受ける前に、ドイツ語圏の音楽の作曲家・演奏家で知っている人物等がありましたか？ もしいた場合、記してください。」

無記入 10 名、「なし」、「いない」と記した学生 2 名、「分かりません」1 名以外の 112 名は、何らかの音楽家の名を記していた。ひとりで最高 29 人の音楽家の名を挙げた学生もいた。シュトラウスの扱いについては、2007 年度と同様に行った。また、作曲家名をアルファベットで書いている場合に綴り間違い (Wargner、Schbert 等) が散見されたが、指している音楽家が明らかな場合は一般的なカタカナ表記に改めて集計した。

(人)

知っているドイツ語圏の作曲家・演奏家	回答者数
ベートーヴェン	82
バッハ	76
モーツァルト	76
シューベルト	45
ヴァーグナー	36
シューマン	20
ハイドン	14
バッヘルベル	14
ブラームス	14
メンデルスゾーン	12
リスト	7
ヨハン・シュトラウス	5
ヘンデル	5

シュトラウス(4)、ドヴォルザーク*(4)、マーラー(4)；R. シュトラウス(3)；アイスラー(2)、ウェーバー(2)、大勢/いっぱい(2)、シェーンベルク(2)、Tokio Hotel (2)；イザーク(1)、ヴァイル(1)、ヴィヴァルディ²⁸⁾(1)、マイケル・ヴェ

28) イタリアの作曲家。

イカート(1)、オネゲル(1)、カラヤン(1)、カルカッシ(1)、グルック(1)、ゲーテ*(1)、ハイナー・ゲッベルス&アルフレート・ハルト(1)、サリエリ(1)、クララ・シューマン(1)、シュターミッツ(1)、エドゥアルト・シュトラウス(1)、ヨゼフ・シュトラウス(1)、フランツ・シュミット(1)、ショパン*(1)、シラー*(1)、パウル・デッサウ(1)、テレマン(1)、ヴェルナー・リヒャルト・ハイマン(1)、C. P. E. バッハ(1)、J. アンブロジウス・バッハ(1)、J. クリストフ・バッハ(1)、J. ニコラウス・バッハ(1)、J. C. バッハ(1)、カイ・ハンセン(1)、フォーゲルヴェアイデ(1)、ブルッフ(1)、フンメル(1)、A. マーラー(1)、ルター(1)、レーガー(1)、Juli (1)、Silbermond (1)、Wir sind Helden (1)

(自由記述式、複数回答あり。回答者数 112 名、総回答数 467)

(5) 「ドイツ語圏の音楽作品で、特に好きなものやよく聴くものがあれば記してください。」

無記入が 59 名、「特になし」等と記した学生が 7 名、「わからない」、「これから知っていきたい」が各 1 名いたが、その他 57 名の学生は何らかの作品名や作曲家名等を記していた。(自由記述式で複数回答あり。)

(人)

ドイツ語圏の音楽作品で特に好きなものやよく聴くもの	回答者数
魔王	7
モーツァルト	7
カノン／パッヘルベルのカノン	6
第九／喜びの歌	5

エリーゼのために(4)、Juli (4)；主よ人の望みの喜びよ(3)、G 線上のアリア(3)、バッハ(3)；エルザの大聖堂への行進曲(2)、トロイメライ(2)、野ばら(2)、ベートーヴェン(2)、ベートーヴェンのスプリング・ソナタ(2)、Silbermond (2)；アイネ・クライネ・ナハトムジーク(1)、アルプス交響曲(1)、運命(1)、オペラ音楽(1)、神々の黄昏(1)、キラキラ星(1)、クラフトワーク(1)、くるみ割り人形*(1)、サラバンド [作曲家名表記なし] (1)、サロメ(1)、シューベルト(1)、シューマ

ン(1)、シューマンのチェロ・ソナタの第3楽章スケルツォ(1)、シューマンのピアノ五重奏曲(1)、小フーガト短調(1)、ため息(1)、デストラクションのリリースフロムアゴニー(1)、田園(1)、ドイツ語圏のクラシック音楽家の曲(1)、バロック時代の音楽(1)、冬の旅のおやすみ・勇気・辻音楽師(1)、バレエ音楽(1)、ブラームス(1)、ブラームスの交響曲第1番(1)、ブランデンブルク協奏曲(1)、ベートーヴェンのクロイツェル・ソナタ(1)、ベートーヴェンの交響曲第7番(1)、ベートーヴェンの悲愴(1)、マーラーの巨人の第4楽章(1)、魔笛(1)、メンデルスゾーンの春の歌(1)、モーツァルトの魔笛の主題による変奏曲(1)、モルダウ*(1)、ラ・カンパネラ(1)、レハール(1)、ワルキューレの騎行(1)、Blumfeld(1)、Die Fanta 4(1)、JuliのGeile Zeit(1)、Das Lied von den braunen Inseln (Kurt Weill)(1)、Die Lorelei(1)、Ohrbooten(1)、Perfekte Welle(1)、Pop(1)、Die Prinzen(1)、Christina Stürmer(1)、Wir sind Helden(1)

(自由記述式、複数回答あり。回答者数 57、総回答数 101)

(6)「ドイツ語圏の音楽に対するイメージ等があれば、記してください。」

無記入が47名、「特になし」、「なし」が計4名、「知らない」、「分からない」、「説明できない」が各1名いたが、それ以外の71名の学生は何らかのことでイメージを記していた。記述内容がひとりずつ大きく異なるため、同じ方向の回答が複数あったものに限って紹介したい。

(人)

ドイツ語圏の音楽に対するイメージ等	回答者数
クラシックの本場	15
有名な曲や作曲家が多い	6
優雅／優しい感じ	5
重い／重厚、堅い、暗い、壮大	各 4
美しい、さっぱりしている、荘厳／おごそか、激しい	各 3
落ち着く／癒される、穏やか、計算されている、豪華、静か、強さがある、ドイツ語圏の人はよくコンサートに行く、流れがある	各 2

(自由記述式。回答者数 71 名)

(7) 「ドイツ語学科を受験し、ドイツ語学科に入学するにあたり、ドイツ語圏の音楽への知識やイメージは何か関係があったでしょうか？」

回答は、「はい」が 25、「いいえ」が 96、無記入が 4 であった。「はい」の場合は、具体的にどのような関係があったのかを問うている。自由記述式で、ひとりずつの記入内容が異なるため、やはり複数の学生が同じ方向で記している場合に限り紹介する。質問には「はい」と回答したが、具体的な関係を記さなかった学生が 4 名いた。

(人)

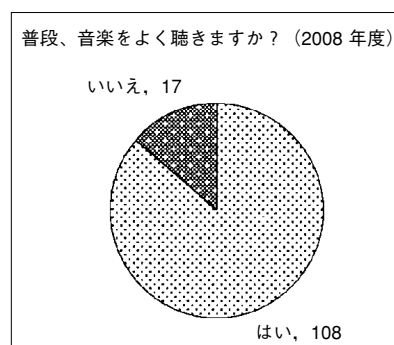
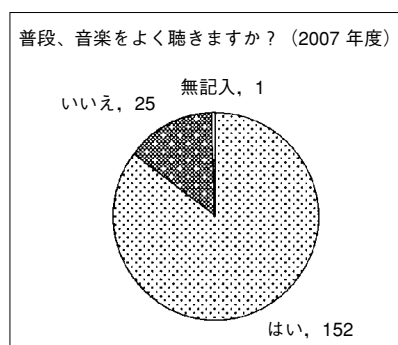
ドイツ語学科選択とドイツ語圏の音楽の関係	回答者数
クラシックが好きなので。	3
ピアノを習うなかで興味をもった。	3
音楽の先生（個人レッスン）からドイツ留学中の話などを聞いてドイツに関心をもった。	2
ドイツ語圏の文化が学びたかった。	2
ドイツ語の歌（野ばら、魔王）からドイツ語に興味をもった。	2
ドイツの音楽／音楽家について学びたかったので、ドイツ語学科を受験した。	2
モーツァルトが好きで、モーツァルトと関係のある国のことが学びたかった。	2

(自由記述式。回答者数 21 名)

4. 調査結果のまとめ

2007 年度と 2008 年度の調査結果から分かったことについて、項目ごとにまとめたい。

(1) 「普段、音楽をよく聴きますか？」という質問に対しては、2007 年度で 85.4 % (152/178 名)、2008 年度で 86.4 % (108/125 名) の学生が「はい」と答えた。



ふだん音楽をよく聴く学生がよく聴くジャンルとして挙げた上位 10 位は、下記の通りである。

よく聴く音楽ジャンル (人)

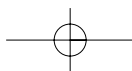
2007 年度			2008 年度		
順位	ジャンル	人数	順位	ジャンル	人数
1	J-POP	58	1	J-POP	53
2	ロック	42	2	クラシック	32
3	クラシック	39	3	洋楽	26
4	洋楽	23	4	ロック	19
5	ポップス	17	5	ポップス	14
6	ジャズ	14	5	ジャズ	14
7	サウンドトラック	6	7	R & B	4
7	邦楽	6	8	ケルト	3
9	カントリー	5	8	吹奏楽	3
9	R & B	5	8	パンク	3

(自由記述式、複数回答あり。有効回答者数：2007 年度 137 名、2008 年度 103 名、総回答数：2007 年度 273、2008 年度 196)

上位 6 位までに入ったものは両年とも同じで、合計人数の多いものから J-POP、クラシック、ロック、洋楽、ポップス、ジャズである。J-POP が多くの大学生に支持されているのは予想通りであるが、クラシックやジャズをよく聴く学生が多いことに注目される。特に、クラシックが 2007 年度の 3 位、2008 年度の 2 位となっていて、有効回答者のそれぞれ 28.5 %、31.1 % がよく聴くジャンルとしているのは特筆される。なお、電通消費者研究センターが 2007 年 2 月に行ったインターネット調査「最新音楽ライフ事情」²⁹⁾によれば、よく聴く音楽

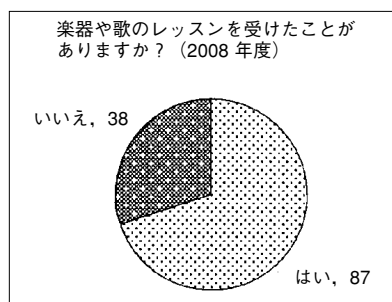
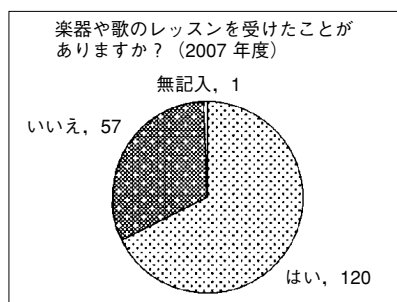
29) <http://www.dentsu.co.jp/trendbox/topics/2007/070312.html> (2008 年 10 月 14 日)

15 歳から 59 歳までの男女計 500 人が対象。全体では、よく聴く音楽のジャンル (複数選択) は「日本のポップス・歌謡曲」がもっとも高く (83.2 %)、「海外のポップス」(38.0 %)、「クラシック」(28.4 %)、「映画音楽」(26.8 %)が続いた。また、もっともよく聴く音楽のジャンルのトップ 3 は「日本のポップス・歌謡曲」(63.0 %)、「クラシック」(9.9 %)、「ロック」(6.2 %)であった。



のジャンルとしてクラシックを挙げたのは、10代では13.0%、20代では15.0%であるので、獨協大学ドイツ語学科学生にはクラシック音楽を好む人が比較的多いと言えよう。

(2)「楽器や歌のレッスンを受けたことがありますか?」という質問に対し、2007年は67.5% (120/178名)、2008年は69.6% (87/125名)の学生が「はい」と答えた。

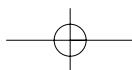


レッスンを受けたことのある学生が挙げた楽器等の上位は、下記の通りである。

レッスンを受けたことのある楽器等 (人)

2007年度			2008年度		
順位	楽器	人数	順位	楽器	人数
1	ピアノ	83	1	ピアノ	63
2	エレクトーン	11	2	ヴァイオリン	11
3	ヴァイオリン	9	3	エレクトーン	6
4	クラリネット	7	4	クラリネット	5
4	フルート	7	5	サクソ	4
6	合唱	6	5	トロンボーン	4
7	声楽/歌	5	7	合唱	3
7	トロンボーン	5	7	ドラム	3
9	箏	4	7	フルート	3
9	打楽器/パーカッション	4	7	ホルン	3
9	ホルン	4			

(自由記述式、複数回答あり。有効回答数：2007年度115名、2008年度85名、



総回答数 2007 年度 185、2008 年度 136)

初心者にとって習いやすく、大手音楽教室チェーンでも普及に力を入れている鍵盤楽器のピアノ、エレクトーンが上位に挙げられているのは、予想通りである。2007 年度は楽器や歌を習ったことのない学生も含めた全回答者の 46.6 %、2008 年度は 50.4 % の学生が、ピアノのレッスンを受けたことがあると回答している。目をひくのは、ヴァイオリンのレッスンを受けたことがある学生が比較的多いことである。ヴァイオリン等の弦楽器は、習得するのに時間がかかることが知られており、かなり熱心に音楽教育を受けさせる家庭に育った学生がいることをうかがわせる。また、管弦楽部に入部している学生が多いことも関連していると思われる。クラリネット、フルート、トロンボーン、ホルンなどの管楽器のレッスンを受けたことがある学生が多いのは、小・中・高等学校でブラスバンド等の活動に参加していた者が多いためではないだろうか。

2005 年に行われた「習ったことがある・習ってみたい音楽について」のインターネット調査³⁰⁾では、回答者のうち 66.7 % が音楽や楽器を習ったことがあり、習ったことがあるものには、ピアノ (57.7 %)、電子オルガン (エレクトーン) (30.8 %)、トランペット・サクソフーン・フルートなど笛 (20.2 %)、コーラス・合唱 (18.8 %)、ギター・ベース (18.8 %)、ドラム・打楽器 (10.6 %) などが挙げられている。ヴァイオリンを習ったことがある人は、楽器や音楽を習った人のなかで 6.7 % である。獨協大学ドイツ語学科でヴァイオリンを習ったことがあるのは、有効回答者の 7.8 %、12.9 % であった。

また、雑誌『音楽の友』が読者を対象に行ったアンケート³¹⁾では、楽器演奏をする人の割合は回答者の 48.0 %、過去に楽器演奏をしていた人が 24.4 %、「演奏する楽器」の 1 位はピアノ、2 位はヴァイオリン、以下フルート、チェ

30) <http://echoo.yubitoma.or.jp/weblog/dailyresearch/aid/149737/> (2008 年 10 月 14 日)

「ゆびとまりサーチ」が 2005 年に会員を対象に行った調査で、回答数 312。

31) <http://www.ongakunotomo.co.jp/magazine/ad/pdf/ONTOMO.pdf> (2008 年 10 月 14 日)

ロ、ギター、クラリネット等となっている。

(3) 「現在、学内・学外で音楽系のサークル活動等に加わっていますか?」という問いに対し、2007年度には14.6% (26/178名)、2008年度には19.2% (24/125名)の学生が「はい」と答えた。2年とも複数の参加者があったのは、管弦楽部 (2007年度=9名、2008年度=9名) とア・カペラ・サークルのOLF M (2007年度=3名、2008年度=7名) である。ジャズや軽音楽、吹奏楽のサークルに参加している学生も、両年度ともいた。

(4) 「本日の授業を受ける前に、ドイツ語圏の音楽の作曲家・演奏家で知っている人物等がいましたか?」という質問に対し、2007年度は95.5% (170/178名)、2008年度は89.6% (112/125名)の学生が何らかの音楽家の名を記していた。ひとりで29人もの音楽家の名を記した学生もいた。上位10位に挙げられた作曲家・演奏家は、下記の通りである。

知っているドイツ語圏の作曲家・演奏家

(人)

2007年度			2008年度		
順位	作曲家	人数	順位	作曲家	人数
1	ベートーヴェン	128	1	ベートーヴェン	82
2	バッハ	107	2	バッハ	76
3	モーツァルト	102	2	モーツァルト	76
4	シューベルト	73	4	シューベルト	45
5	ヴァーグナー	35	5	ヴァーグナー	36
6	ハイドン	29	6	シューマン	20
7	ブラームス	24	7	ハイドン	14
8	J. シュトラウス / ヨハン・シュトラウス II世	21	7	バッハルベル	14
9	シューマン	18	7	ブラームス	14
10	リスト	16	10	メンデルスゾーン	12

(自由記述式、複数回答あり。有効回答者数：2007年度170名、2008年度

112名、総回答数：2007年度617、2008年度467)

どちらの年度でも、トップ3はベートーヴェン、バッハ、モーツァルトが占めている³²⁾。4、5位に挙げられた作曲家も両年度とも同じである。シューベルト、ヴァーグナーを挙げている学生がこれほど多いのは、ドイツ語専攻ならではのことと思われる。特にシューベルトは、ドイツ・リート作曲家として、ドイツ語入門者向けの書籍等にも紹介されることが多いため、名前を挙げる学生が多かったと考えられる。やはりバッハ以降の作曲家の知名度が高いが、パッヘルベルを2008年度に14名もの学生が挙げていることに注目される(2007年度は7名)。

ちなみに、『音楽の友』誌の2006年7月号で発表されたアンケート結果「クラシック音楽ベスト・テン」³³⁾では、「あなたの好きな作曲家は？」の1位がモーツァルト(1474票)、2位がベートーヴェン(1248票)、3位がチャイコフスキー(741票)で、以下10位までに挙げたドイツ語圏の作曲家には4位ブラームス(733票)、5位バッハ(717票)、8位シューベルト(390票)、9位マーラー(387票)、10位ワーグナー(296票)がいる³⁴⁾。今回私の行った調査では知っているドイツ語圏の作曲家・演奏家をたずねたのに対し、『音楽の友』誌では「好きな作曲家」をたずねており、ドイツ語圏にも限定していないので、おのずと調査結果の性質は異なる。とはいえ、ドイツ語専攻学生にとってはバッハ、モーツァルト、ベートーヴェンのみならず、シューベルト、ヴ

アンケートを行った時期や回答総数等は記されていない。

- 32) 渡辺裕は、ベートーヴェン、バッハ、モーツァルトをクラシックを代表する有名音楽家として挙げ、そのイメージについて論じている。渡辺裕『聴衆の誕生。ポストモダン時代の音楽文化』春秋社、1989年、32～35頁。
- 33) 音楽の友編集部「読者投票によるランキング。クラシック音楽ベスト・テン」、『音楽の友』2006年7月号、65～95頁。読者対象のアンケート。有効回答数2461通。各設問では5つまで回答可。
- 34) 『音楽の友』2006年7月号、80頁。なお、その5年前、2001年の調査では、1位ベートーヴェン、2位モーツァルト、3位バッハおよびブラームス、7位マーラー、9位ブルックナー、10位シューベルトであった。

ァーグナーの存在感が大きいという傾向は指摘できよう。また、マーラーを挙げた学生が少ないことも指摘できる。

このアンケートは授業前に記入してもらったが³⁵⁾、総回答者数の平均で2007年度は3.6人、2008年度は4.2人のドイツ語圏の演奏家・作曲家名を挙げていた。3～4人程度のドイツ語圏の音楽家は資料を見ずに思い浮かべられる学生が多いようである。例年、「ドイツ語圏入門」で講義をすると、「ドイツ語圏にこんなにたくさんの作曲家がいたのを知らなかった」等の感想が複数寄せられる。講義をきっかけに、ドイツ語圏の音楽や文化に関心を深めてもらえればと考えている。

(5)「ドイツ語圏の音楽作品で、特に好きなものやよく聴くものがあれば記してください」という欄には、2007年度は55.1% (98/178名)、2008年度は45.6% (57/125名)の学生が何らかの回答を記していた。「音楽作品」をたずねたが、作曲家名やアーティストのグループ名を記したり、あるいは「クラシック」と記したりした学生もいた。上位に入った9つを挙げる。なお、講義で部分的にでも聴かせた音楽作品には、表中に#印を付した。

35) 特に(4)の質問の回答はすぐに記入して、あとから加筆しないように学生たちに口頭で伝えた。

ドイツ語圏の音楽作品で特に好きなものやよく聴くもの (人)

2007年度			2008年度		
順位	音楽作品名	人数	順位	音楽作品名	人数
1	魔王#	13	1	魔王#	7
2	モーツァルト	10	1	モーツァルト	7
2	アイネ・クライネ・ナ ハトムジーク#	10	3	カノン#	6
4	第九	9	4	第九／喜びの歌	5
5	クラシック	7	5	エリーゼのために	4
6	青く美しきドナウ#	6	5	Juli	4
6	カノン#	6	7	主よ、人の望みの喜びよ	3
8	野ばら	5	7	G線上のアリア#	3
8	モーツァルトのトルコ 行進曲	5	7	バッハ	3

(自由記述式、複数回答あり。有効回答者数：2007年度98名、2008年度57名、総回答数：2008年度162、2008年度101)

シューベルトの《魔王》が両年ともトップに挙げられている。質問(4)の知っているドイツ語圏の作曲家・演奏家で、シューベルトが4位に挙げられていたのに関連していて興味深い。なお、《魔王》は、中学校1年の音楽鑑賞教材である。モーツァルト、《第九》、《カノン》を挙げた学生が多いのも、両年度に共通する。しかし、この(5)の回答で挙げられた作品は、講義で鑑賞させた音楽の内容とも関連していると考えられる。たとえば、《青く美しきドナウ》を挙げた学生が2007年度には6人いるのに対し、2008年度には1人もいないのは、そのことから説明できよう³⁶⁾。また、提出順の近いアンケート用紙に

36) 「ドイツ語圏入門」の講義では、再履修者もいることから、毎年、CD等で紹介する作品(2007年度、2008年度とも17曲)のうち3分の1程度を入れ替えている。また、配布資料には、鑑賞作品以外にも、多数の作曲家や作品の名を挙げている。

同じ作品が書かれていたことなどから、回答時に近くに座った学生どうして情報交換を行った可能性も考えられる。

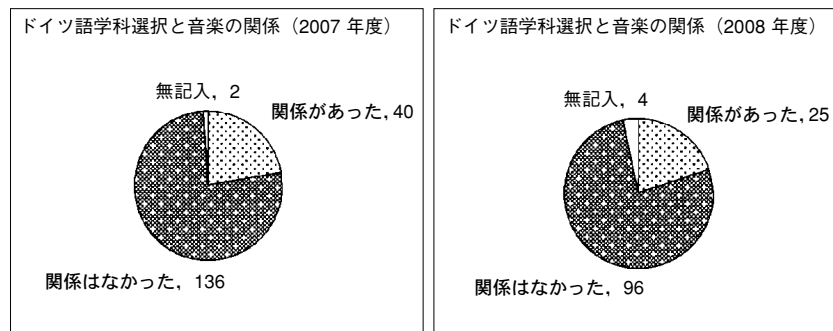
なお、上述の『音楽の友』誌 2006 年 7 月号のアンケート結果では、「あなたの好きなクラシック音楽作品は？」³⁷⁾の上位 10 位までに含まれるドイツ語圏の音楽作品としては、1 位のベートーヴェン《交響曲第 9 番「合唱」》、2 位のベートーヴェン《交響曲第 5 番「運命」》、3 位のモーツァルト《レクイエム》、4 位のモーツァルト《魔笛》、5 位のモーツァルト《交響曲第 41 番「ジュピター」》、9 位のマーラー《交響曲第 2 番「復活」》、10 位のワーグナー《ニーベルングの指環》がある。このうち獨協大学でのアンケート結果で上位に入ったのは、《第九》のみであった。また、獨協大学でのアンケートで 1 位であったシューベルトの《魔王》は、『音楽の友』のアンケート結果では「あなたの好きな声楽曲は？」の 13 位ようやく登場する³⁸⁾。

(6) 「ドイツ語圏の音楽に対するイメージ等があれば、記してください。」との質問に対しては、2007 年度で 66.9 % (119/178 名)、2008 年度で 56.8 % (71/125 名) の学生が何らかのことばでイメージを記していた。両年ともに複数の学生が挙げたイメージをみていく。まず、ドイツ語圏は「クラシックの本場」だと考えている学生が各年度とも一番多い (2007 年度 = 30 名、2008 年度 = 15 名)。つづいて、「力強い／強さがある」 (2007 年度 = 9 名、2008 年度 = 2 名)、「暗い」 (2007 年度 = 7 名、2008 年度 = 4 名)、「有名な音楽家や有名な曲が多い」 (2007 年度 = 4 名、2008 年度 = 6 名) というイメージをもっている学生が多い。その他では、「重い／重厚」、「かたい」、「美しい」、「優雅」、「きっちり (かっちり) している」、「荘厳」、「壮大」といった言葉が多く挙げられていた。

37) 『音楽の友』2006 年 7 月号、82 頁。

38) 『音楽の友』2006 年 7 月号、92 頁。

(7) 「ドイツ語学科を受験し、ドイツ語学科に入学するにあたり、ドイツ語圏の音楽への知識やイメージは何か関係があったでしょうか？」という質問に対し、2007年度は22.5% (40/178名)、2008年度は20.0% (25/125名)の学生が「はい」と答えた。



具体的にどのような関係があったのかについては、クラシックが好きなのでドイツ語圏のことを学びたいと思った、音楽の先生の話を書いてドイツに興味をもった、ピアノを習うなかで興味をもった、ドイツ語の歌からドイツに興味をもつようになった、ドイツの文化が学びたかった、ドイツの音楽や音楽史を学びたかった、といった意見が寄せられた。音楽が好きでドイツ語学科を受験することを決めた学生が、一定数以上いることがうかがえる。この質問に「はい」と答えた学生には楽器等のレッスンを受けたことのある者が多く、1名を除いて(4)の回答にドイツ語圏の作曲家名を記しており、他の自由記述項目にも積極的に記入している学生が多かった。

なお、春・秋学期に行っている「ドイツの音楽」の講義(対象は2年生以上³⁹⁾)で4月初回に同じ質問をしたところ、2007年度は32.9% (28/85名)、2008年度は31.0% (22/71名)がドイツ語学科受験・入学とドイツ語圏の音楽への知識・イメージは関係があったと答えた。2007年度に「ドイツ語圏入門」を履

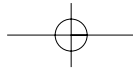
39) ドイツ語学科以外の受講生もいるが、集計はドイツ語学科学生からの回答のみで行った。

修した学生が2008年度に「ドイツの音楽」の講義を履修しているケースがあるなど重複があるが、音楽の講義をさらに受講する学生には、ドイツ語圏の音楽への関心を受験前から持っている学生の割合がやや高いと言えよう。

5. おわりに

2回のアンケート調査の結果を集計し、獨協大学ドイツ語学科学生に音楽の授業を行う前提条件を、ある程度明らかにすることができたと考えられる。本稿4. でみたように、ドイツ語学科学生には、音楽を普段からよく聴く者が多く、クラシック音楽を好む割合も一般のアンケート調査に比べると（同年代では）高い。楽器を習ったことがある者も比較的多いと言えよう。しかし、ドイツ語圏の作曲家・演奏家をひとりも知らないと言った学生が2007年度で2名、2008年度で3名（無記入者を除く）いたことも見落としてはならない。ドイツ語力のみならず、ドイツ語圏に関する基礎的な知識も備えた人材を育成するために、音楽に関心のない学生にもインパクトのある授業を心がけたい。もともと知識や関心のある学生には、バッハ以前の中世からのドイツ語圏の音楽も含め、広く深いドイツ語圏の音楽の世界に触れてもらいたい。そして、知識と教養を身につけ、より豊かに生きていく手助けとなればと考える。「ドイツの音楽」の講義を担当してとても嬉しいのは、以前はクラシックはつまらないと思い、自分から聞いたことがほとんどなかったが、講義をきっかけに好きになったので家でも聴いているというような意見を寄せてもらえるときである。この授業をきっかけに、留学先や旅先でドイツ語圏の人と音楽の話題で語り合えるようになれば素晴らしいと思う。

また、今回のアンケートで多くの学生が好きな作品として挙げたものは「ドイツの音楽」の講義で必ずとりあげたり、歌詞のある作品については適宜解説を加えてドイツ語歌詞から音楽に興味をもった学生の要望に応えるなど、今回のアンケート結果を授業内容に反映させていきたいと考えている。ポップス等を紹介する際に、今回の調査で学生が挙げたグループの作品もとりあげること



を検討したい。「ドイツの音楽」の講義では、折に触れ他の国や地域の同時代の重要な音楽家や作品もとりあげているが、今回、ショパンやドヴォルザーク、スメタナの《モルダウ》などをドイツ語圏の作曲家・作品として挙げた学生がいたことから、周辺国の音楽の扱いについても再考したい。

なお、他大学のドイツ語専攻学生でもすべての点について同じ傾向があるかは分からない。機会が与えられれば、他大学でも同様の調査を行いたい。

引用文献

- 鳥賀陽弘道『J ポップとは何か。巨大化する音楽産業』岩波書店、2005年。(岩波新書945)
- 音楽の友編集部「読者投票によるランキング。クラシック音楽ベスト・テン」、『音楽の友』2006年7月号、65～95頁。
- みつとみ俊郎『音楽ジャンルって何だろう』新潮社、1999年。(新潮選書)
- ロスタン、クロード『ドイツ音楽』(Claude Rostand, *La musique allemande*, 1960) 吉田秀和訳。東京：白水社、1966年。(文庫クセジュ 394)
- 渡辺裕『聴衆の誕生。ポストモダン時代の音楽文化』東京：春秋社、1989年。
- Beißwenger, Kirsten. „Musikwissenschaftliches Fachseminar für German-Studies-Studenten. Ansätze zu einer Methodik im fachlichen Unterricht.“ In *Dokkyo-Universität Germanistische Forschungsbeiträge* Nr. 59 (März 2008), S. 45-59.